

編 集 後 記

31巻3号の構成は会長講演を巻頭にして、原著論文6、症例報告7編である。各論文の著者の所属は原著ではさすがに大学が多いが、症例報告では内5編が大学以外の施設から投稿されたもので本誌編集委員の一人として良い傾向であると思います。

ご承知のように最近各界で自己点検・評価をしたり、第三者の評価を進んで受けることによって現状と課題を把握して更なる発展を図ろうとすることが行われています。そこで私が仮に第三者であるとして、本号から見た日本消化器外科学会雑誌を評価してみました。会長講演が掲載されているのは参加できなかった会員にとっても有益であり、その他学会機関誌として必要な学会の情報を知ることができます。原著には実地臨床に必要な新しい知見が発表されており、症例報告にも何か一点突っ込んだ知見が加えられています。一方、本号に限って言えば残念ながら新しい研究手法による研究成果の報告や目下のトピックスと関連した論文が少ないように思われます。

現状としては消化器外科学領域の最も質の高い邦文誌であるべき本誌の使命はかなり良く果されていますが、更に良質の論文が掲載されるように工夫、努力をされたいというような評価をすることになろうかと思えます。

この課題を克服するためにはよく指摘されているように英文誌との共存を一層工夫する必要があるでしょう。早く載せて欲しい、まず国内で発表したい、日本語で詳しく書きたい等々の多様な会員のニーズに敏感に答えられるよう更に努力をすることが必要かと思えます。

考え込んでいる内についついこんなことを書いてしまいました。一人の会員である私とは言えば、良いデータの出た実験研究は英文誌に投稿をするよう勧めたり、本誌に投稿したいという教室員には中味がもう一つだから等と注文をつけている始末です。

ここで反省をしました。日々の診療の中にこそきちんとしたデザインをして臨床研究をしなければならぬという教科書の一節を思い出しました。今年はこれで頑張りたいと思います。

(日置紘士郎)